

(4) 人権尊重の視点からの学校づくりと学力向上



効果のある学校 (effective school)

文部科学省「人権教育の指導方法等の在り方について(第3次とりまとめ)」から

「確かな学力」を育む上では、児童生徒一人一人の個性や教育的ニーズを把握し、学習意欲を高め、指導の充実を図っていくことが必要であり、そのためには、学校・学級の中で、一人一人の存在や思いが大切にされるという環境が成立していなければならない。

このように見た場合、校内に人権教育の理念に基づく教育活動を行き渡らせることは、学習指導の効果的な実施を図る上でも、重要な観点の一つとなるものと考えられる。

学校においては、「確かな学力」を育むためにも、学校全体として「一人一人を大切に、個に応じた目的意識のある学習指導に取り組む」等の教育目標の共通理解を図るとともに、学ぶことの楽しさを体験させ、望ましい人間関係等を培い、学習意欲の向上に努めることが求められている。

また、「**効果のある学校 (effective school)**」に関する研究が国内外で進められている。これらの研究では、「教育的に不利な環境の下にある児童生徒の学力水準を押し上げている学校」において、学力の向上と人権感覚の育成が併せて追求されている点に注目しており、人権感覚の育成は、児童生徒の自主性や社会性などの人格的な発達を促進するばかりでなく、学校の役割の大事な部分を占める学力形成においても成果を上げているとの指摘を行っている。

「格差社会」という言葉が浸透しつつある中、子どもたちの学力をめぐっても「格差拡大」が懸念されています。

また、各種学力調査等の結果から、親の収入や家庭環境等が子どもの学力に密接に関連することなどが指摘されています。

欧米では、学校環境の要因よりも家庭環境の要因が圧倒的に子どもの教育達成に影響を与えるとする考え方がある一方で、「学力格差」の縮小に対して学校が有効に機能することがロナルド・エドモンズ(Ronald Edmonds)らによって提唱されてきました。

「効果ある学校」とは、経済的に困難を抱える家庭が集中するような条件の下でも学力向上に効果をあげている学校のことであり、そのような学校には、以下のような特徴があることが指摘されています。



子どもたちの学習に対する積極性

- 家庭学習時間
 - 苦手教科に対する克服意欲
 - 自主的な取組
 - 読書活動
- などにおいて高い数値を示す。

言語活動を重視した学習活動

- ドリルや小テストの使用は比較的少ない。
- 発表や討論を重視した学習活動などが特徴的である。

教師と子どもたちの良好な関係

- わからないことがあった場合、「先生に聞く」と回答した子どもが圧倒的に多く、教師との関係性のよさがうかがえる。

学級の雰囲気が良い

- 「仲間と助け合う」とか「いじめを許さない」といったことなどを背景として、学級集団における居心地のよさが確保されていることが重要な要素となっている。

※日本におけるこれらの研究は、校区に同和地区がある学校などの取組を基盤として進められてきました。人権を尊重した学校づくりが、子どもたちの自尊感情を支える学力の向上につながっていくことが様々な分析・研究から指摘されています。

「効果のある学校」をさがす

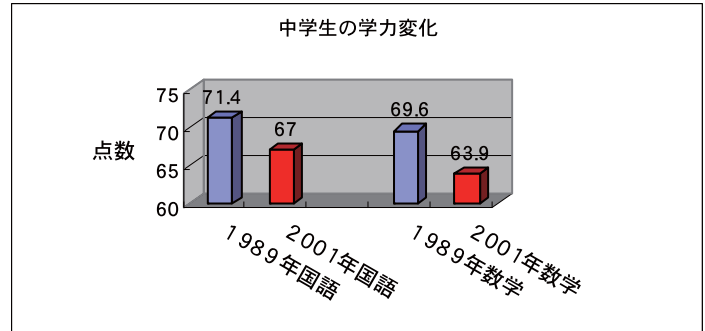
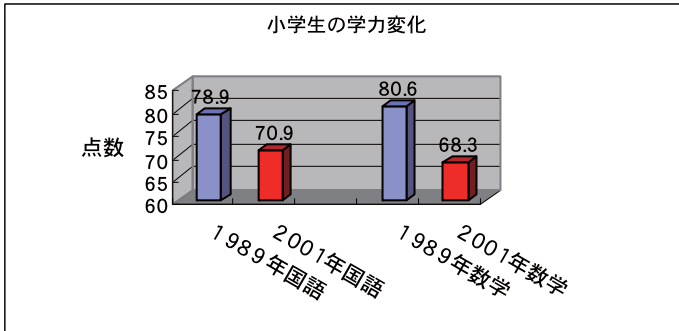
「効果のある学校」とは具体的にどのような学校でしょうか。

次の研究結果は、大阪大学の志水宏吉教授を中心としたグループが2001年に小・中学校において調査した結果と1989年の調査結果を比較研究したもので得られたものです。子どもの学力には家庭環境が大きな影響を与えていることは確かではありますが…

志水宏吉「学力を育てる」岩波新書

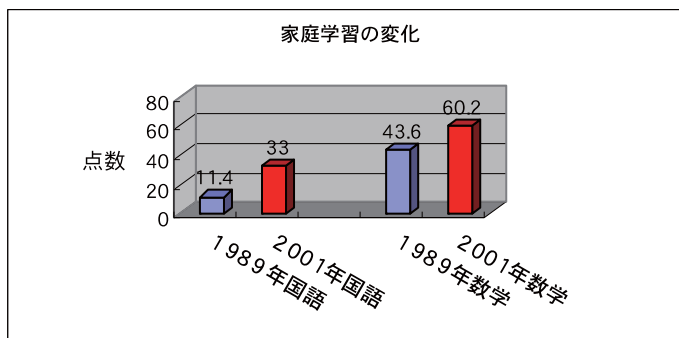
1 基礎学力の低下

1989年と2001年の平均点を比較すると、小学校、中学校ともに低下している様子が見られます。



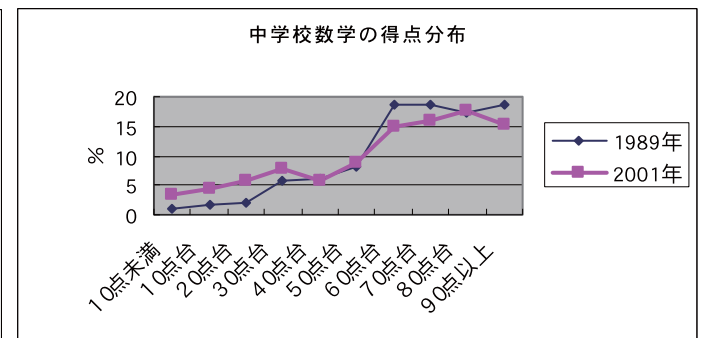
2 家庭学習離れ

「宿題・復習をやらない」子どもの割合です。
いずれも増えています！



3 学力の二極分化

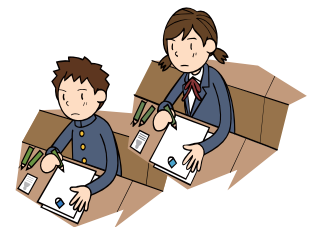
高得点者が相対的に減少し、30点台に山が出現しています(学力の二極分化)。



4 家庭環境による格差

調査対象になった15校の小学校データから作成されたものです(志水宏吉「学力を育てる」岩波新書)。

	父大卒 (%)	文化的階層 (%)	通塾 (%)	国語平均 (点)	算数平均 (点)
D小	48.6	54.5	36.0	74.7	65.9
E小	25.0	38.0	13.9	79.9	80.1
F小	24.2	33.3	30.8	67.7	66.2
G小	20.0	22.4	17.0	63.2	48.4
平均	29.0	33.1	29.4	70.9	68.3



太字で示した3つの項目は子どもたちの家庭環境を表す指標として設定されたものです。

- ①父大卒 …… **親の学歴**の影響を考える指標です。
- ②文化的階層 ……「家の人はニュース番組を見る」、「家の人に博物館や美術館に連れて行ってもらったことがある」、「家にはコンピュータがある」など家庭の**文化的環境**を考える指標です。
調査対象をこの指標によって「上位」、「中位」及び「下位」に均等に分配したとき、「上位」にあてはまる割合の数値を表に掲載しています。
- ③通塾 …… 塾に通うことができる**経済的環境**を考える指標です。

5 「効果のある学校」の発見

前表のデータからは、経済状況や文化的な環境等の「家庭環境が子どもの学習成績に一定の影響を与えている」ことが読み取れそうですが…

★ E 小学校のデータに注目してみましょう!

家庭環境的に特に恵まれているわけではない
(通塾率は15校中14位, 父親の大学卒業割合は15校中7位でした)

その中であって、高い基礎学力の形成に成功しています。

E 小学校は 「効果のある学校」 ではないか

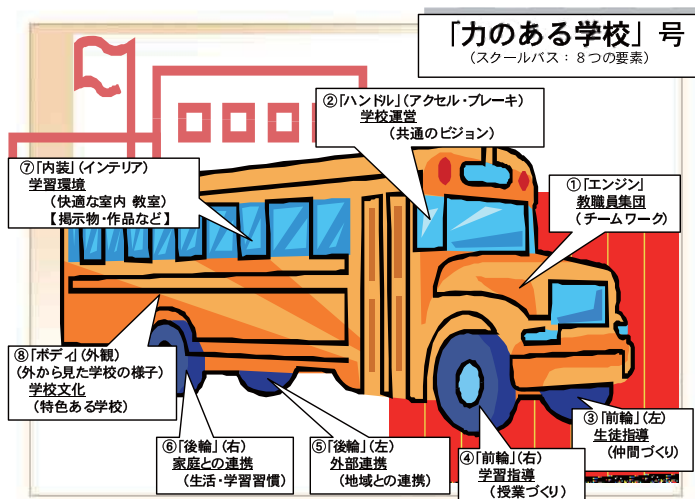


この後の志水教授らの現地調査により、E小学校では、次のような実践をしていることが明らかになりました。

- 1 わからない時にわからないと言える学習集団づくり
- 2 授業と家庭学習との有機的なリンク
- 3 弾力的な指導体制と多様な授業形態
- 4 学習実態の綿密な把握
- 5 学習内容の定着をはかる補充学習
- 6 動機づけをはかる総合学習の推進



「効果のある学校」(effective school) から「力のある学校」(empowering school)へ



大阪府教育委員会からの委託を受けて進められた志水教授らの調査研究は、「学力や生活に課題を抱えている子どもの学力を下支えしている」学校(「効果のある学校」)の発見に留まらず、「すべての子どもたちに対して、本来持っている力を十分に発揮させることができる学校」(「力のある学校」)への提言に発展しています。

左図は、「力のある学校」の要素がスクールバスのイメージで図案化されたものです。

「すべての子どもたちが自分の持てる力を発揮できる」…それはまさしく人権としての教育の基盤であり、個別課題への取組がより効果的に進められるためにも、学校としての基盤整備に力を注ぐことが求められます。

【参考図書】

「公立学校の底力」志水宏吉 ちくま新書

「格差社会と教育改革」荻谷剛彦 山口次郎 岩波ブックレット

「学校にできること～一人称の教育社会学～」志水宏吉 角川選書

「格差をこえる学校づくり～関西の挑戦～」志水宏吉編 大阪大学出版会

「大阪の子どもたち～子どもの生活白書～2003年度版・2004年度版」大阪府人権教育研究協議会